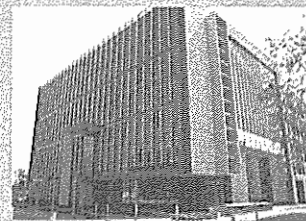


千葉大学とUC San Diego 共同研究拠点 ワクチン治療の新たな展望切り開く



Chiba University



UC San Diego HEALTH SCIENCES



千葉大学と米カリフォルニア大学サンディエゴ校 (UCSD) は先ごろ、共同研究の成果を発信するシンポジウムを2日間にわたって開催した。2016年3月に日米双方の大学内に設置された国際研究拠点、「粘膜免疫学・アレルギー治療学・ワクチン開発研究センター (cMAV)」で進められている次世代型粘膜ワクチンによる治療が世界にもたらす恩恵を巡り、熱い議論が交わされた。

革新的予防と治療学確立へ 未来志向で価値創生目指す

「千葉大学との提携は、私がこれまでに関わったなかでも最高の成果です。千葉大学の、なんとしても提携を成功させたという意気込みと真剣さには、並々ならぬものを感じます」

シンポジウムの2日目、取材に応じてこう言い切ったのは、バイオ工学をはじめ科学分野で世界的に名高いUCSDの、副学長兼医学部長デビッド・ブレナー教授。医学の飛躍的な発展に向けた両校の挑戦に、確かな手応えと自信をにじませた。

初日は、千葉大学の中山俊憲副学長兼医学部長らによるcMAVについての説明を皮切りに、両校若手研究者を中心とした研究成果の講演やポスター発表が行われた。現

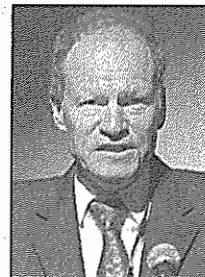
在の注射型ワクチンに代わり、病原体の入り口となる気道や腸管など粘膜面の免疫活性化を図る経口型予防ワクチンによる、革新的治療学の確立を目指す。

2日目の挨拶に立った同大学徳久剛史学長は、学際的な研究も積極的な国際化も、ともに「未来志向で価値創生を目指す本学には不可欠の事業」

徳久千葉大学学長



ブレナーUC San Diego 校副学長



両国の強み有機的に生かす 長期的視点で基礎を盤石に

基調講演は文部科学大臣補佐官の鈴木寛氏が登壇。両校研究の先進性を強調し、日米両国の強みを有機的に、かつ効果的に生かす「エコシステム」の構築を呼びかけた。日本の強みとして、新薬創生の促進や医療制度の高度化を目指した近年の法整備を例に挙げ、有望な医薬品候補の早期認証の仕組みは、開発費の抑制を含めて先端研究開発を後押しすると説明。鈴木氏は「日本の承認制度は進化しました。米国の医薬品会社もその利点を活用するために、開発拠点を日本に開設する動きが見え始めています」と報告した。

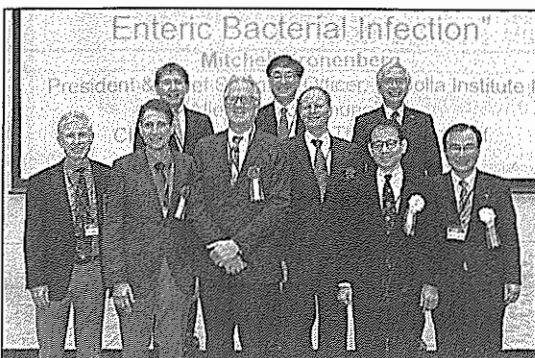
両校の交流と今後への期待が語られたパネルディスカッションや最新

登壇した各講師が、この提携の推進役として敬意を表した人物がいる。千葉大学・東京大学の教授で、cMAVサンディエゴ拠点の所長を務める清野宏氏がその人。粘膜免疫分野の権威として

日米連携でイノベーションを起こす意義を力説する、鈴木文部科学大臣補佐官



研究成果を発表する数々の講演では、聴衆からも次々と質問が飛び交い、両校の提携への幅広い分野からの関心をうかがわせる。登壇した各講師が、この提携の推進役として敬意を表した人物がいる。千葉大学・東京大学の教授で、cMAVサンディエゴ拠点の所長を務める清野宏氏がその人。粘膜免疫分野の権威として



前列右から徳久千葉大学学長、鈴木文部科学大臣補佐官、ブレナーUC San Diego 校副学長、後列中、中山千葉大学副学長

と述べた。千葉大学では今年4月に治療学人工知能(AI)研究センターを新設。AIの医療応用の観点から、データサイエンティスト育成を含め、UCSDなど連携機関との革新的な国際共同研究の創出が期待されている。

千葉大学はいま、日本が国策として進める次世代医療産業の醸成戦略の先端を走る。文部科学省の学術機関課長西井知紀氏は、この戦略の実行に向けて、海外の大学との強固な共同研究体制の構築が特に重要であり、両校の活動がそのけん引役となるよう期待を述べた。千葉大学大学院医学研究院副院長の齋藤哲一郎教授から次世代グローバル研究リーダー育成に向けた成果、UCSD医学部のピーター・エールンスト教授からcMAVの進捗などについて報告された。

知られる清野氏は、日米両国から託された大きな期待に応える決意で任務に臨むと語った。cMAVを立ち上げるプロジェクトチームを率いた千葉大学の中山副学長も、記者の質問に、不逞の覚悟を示した。

「このプロジェクトに失敗は許されない。長期的な観点から足場を固め、一步一步、盤石な基礎を築いていきます」

広告

企画・制作=日本経済新聞社
クロスメディア営業局



CHIBA UNIVERSITY

千葉大学

http://www.chiba-u.ac.jp/